

日本の昔ばなし

著作権保護コンテンツ

紙芝居



『こたろうとりゅう』

脚本／津田真一 絵／ザ・キャビンカンパニー
2,090円(童心社)

竜の子として生まれたこたろうは、人間の村で育ちました。貧しい村を救うために旅立ち、母親の竜と力を合わせて岩山を突き崩し、湖の水を流します。長野の伝説をもとにした壮大な物語を、迫力ある絵で描きます。

トリニタード・トバゴ



『はじめての やぎとライオン』

絵／小山友子
1,925円(教育画劇)

激しい夕立にあつてしまつたヤギは、ライオンの家で雨宿りをさせてもらうことになりました。親切そうなライオンですが、自分を食べようとしていると気づいたヤギは……。

ウクライナ



『わらのうし』

脚本／八百板洋子 絵／日紫喜洋子
2,090円(童心社)

おばあさんに言われて、おじいさんがつくつた「わらのうし」。タールを塗つて草原に連れていくと、クマやオオカミ、キツネがびたつとくつついでしまいます。わらのうしによって、貧しい暮らしは思いがけない方向へ。



『おむすびころりん』

脚本・絵／長野ヒテ子
1,650円(童心社)

おばあさんのにぎったおむすびを持って、おじいさんは薪を切りに出かけました。おむすびは「ころころころ～」と転がつて、穴の中へ。あとを追つたおじいさんが出会つたのは……。画面を抜くたびに楽しさが広がります。

イギリス

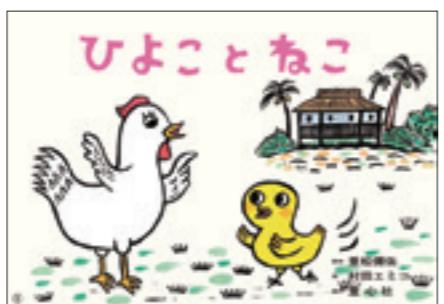
『3びきのくま』

脚本／はせがわさとみ
絵／和歌山静子
2,090円(童心社)

散歩に出かけたクマの家に、ひとりの女の子がやつてきます。スープも、椅子も、ベッドも「大きい」「中くらい」「小さい」と全部試してみて……。怖いもの知らずな女の子とクマの出会いを描いたイギリスの民話。



マンマー



『ひよことねこ』

脚本／重松彌佐 絵／村田エミコ
2,090円(童心社)

大好きなケーキを焼いてもらうために、ヒヨコが薪を拾いに行くと、ネコに会いました。食べられそうになったヒヨコは、ケーキを食べに来るよう言つて、逃がしてもらいますが、ついケーキを全部食べてしましました。

イギリス

『みつつのねがいごと』

脚本／やえがしなおこ 絵／伊野孝行
1,540円(童心社)

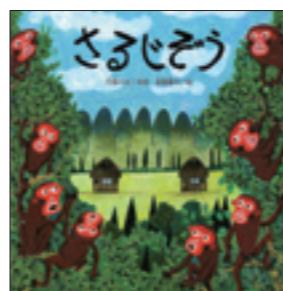
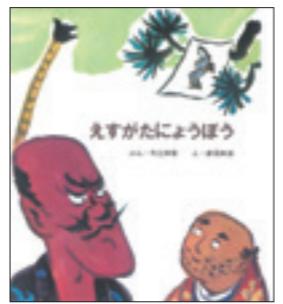
木こりが森で木を切ろうとすると、木の妖精があらわれ、木を切らないなら3つの願いごとをかなえると言いました。木こりは切らはずに家へ戻りますが、つい「ソーセージが食べたい!」と言つてしまひます。



『えすがたにょうぼう』

文／今江祥智 絵／赤羽末吉
1,650円(BL出版)

働き者の門太は夕顔の花のような美しい女房を得ますが、女房のことが気になつて仕事にならず、絵姿を畠に持参します。その絵が殿さまの目にとまり女房を奪われるも、笑顔にできたのは門太だけ。愛と知恵で女房を取り戻す爽快な民話。



『さるじぞう』

再話／大黒みほ 絵／斎藤隆夫
1,430円(あすなろ書房)

川辺で大福をたらふく食べて眠くなつてしまつたおじいさんは、そのまま眠つてしまつました。それを見つけたサルたちはお地蔵さんと間違えて、おじいさんを川向こうのお堂へ運ぼうと川を渡ろうとします。



『国生みイザナギイザナミ』

文・絵／飯野和好
1,540円(パイインターナショナル)

はるか昔、イザナギとイザナミの2柱の神が日本の島々を生みました。やがて火の神を生んだイザナミは黄泉の国へ。日本のはじまりを描く壮大な「国生み」の神話が迫力いっぱいに描かれます。「日本の神話」シリーズ全5巻。



『おんぶおばけ
日本むかしばなし』

文・絵／いもとようこ
1,650円(金の星社)
村人たちが恐れる「おんぶおばけ」。けれど、ひとりのおばあさんが「わしがおんぶしてやるわい」と言い、子守歌まで歌つてやります。おばけはうれしそうに背中にゆられ、その姿はやがて……。



『シマフクロウとサケ
アイヌのカムイユカラ(神譜)より』

古布絵制作・再話／宇根静江
品切れ中(藤原書店)
炎のように輝く大きな目のシマフクロウは、村を見守る神の鳥。ところが群れのはしを泳ぐサケがあざ笑います。すると、瞬く間に海は干上がり……。自然への畏怖を伝える神譜を、古布とアイヌ伝統の刺しゅうで綴り、描きだします。

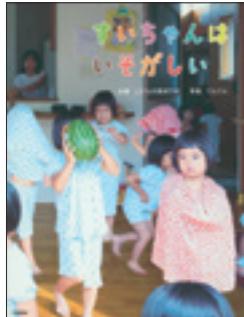


『マーヤのさるたいじ
女の子の昔話えほん 日本のおはなし』

再話／中脇初枝 絵／唐木みゆ
1,870円(偕成社)

川で拾つた桃の種から木を育てたマーヤ。するいサルに実をとられてしまい、退治に出かけます。道中で出会つた仲間たちと力を合わせ、サルをこらしめられるかな? 女の子が主人公の沖永良部島に伝わる昔ばなしです。

著作権保護コンテンツ



『すいちゃんはいそがしい』

企画／子どもの視点ラボ
写真／てんてん
1,650円(Gakken)
すいちゃんの一日が始まりました。公園やお買い物に行って過ごします。その間にもあつちへ行ったりこつちへ行つたりと、いろいろ動き回る様子をとらえています。寝ている間もじつとしていません。



新刊

『へんしんみず!』

構成・文／川村康文、小林尚美
写真／遠藤 宏
1,540円(岩崎書店)

触れるけれど、つかめない水を水風船に入れて凍らしてみたら、カチコチになりました。割ってかけらになったものをお鍋に入れてあたためると、あつという間にとけて、さらに水は変身します。

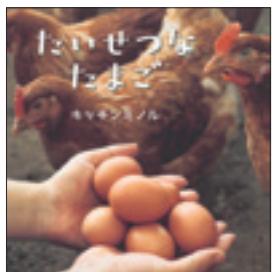
『ひこうきがしゅっぱつします』

写真／岡田光司 文／岡田康子
1,650円(文研出版)

空港に到着した飛行機の、次の出発の準備を整えるのが、グランドハンドリングの仕事です。500人分の荷物や食べ物などを出し入れし、準備を整え牽引車で飛行機を誘導路に導くまでを、55分で済ませます。



身のまわりで
発見する



『たいせつなたまご』

作／キッチンミノル
1,320円(白泉社)
写真／吉田亮人 文／矢萩多聞
2,420円(創元社)

ハコニワ・ファームの朝は、ニワトリたちの健康チェックから始まります。エサやり、水やり、籠の始末や道具の掃除、いろいろな人が働くなか、ニワトリたちが卵を産み落としました。



『はたらく本屋』

写真／吉田亮人 文／矢萩多聞
2,420円(創元社)

大阪の長谷川書店で働くみのるさんの一日を見ていきましょう。朝9時、シャッターを潜り抜けて店内へ入り、おじさんたちと開店準備。10時に開店したら、接客や品出しなどで、あつという間に夜10時の閉店です。



『みんなをつなぐアイヌの糸』

写真・文／横塚真己人
2,035円(ほるぷ出版)

アイヌの女性たちが織ってきたアットウシと呼ばれる伝統的な布を、北海道の雪子さんは60年以上織り続けています。それは、オヒヨウの木の皮をはいで、なめらかな内皮で糸をつくることから始まります。



『たんぽぽはひとがすき』

写真／埴 沙萌
文／嶋田泰子
2,200円(ポプラ社)

タンポポは、背が低く光が届かないで、3つの作戦で太陽の光を手に入れます。まわりの草が枯れる秋に葉を広げること、ほかの植物が育ちにくいところで生きること、刈られても負けないこと。タンポポは人のそばで咲いています。



『シロツメクサはともだち』

作／鈴木 純
1,540円(ブロンズ新社)
道端に咲く白い花、シロツメクサは丸い花のようですが、実は小さな花が集まっている、その数は100個くらいあることも！花がしおれて、種ができ、また芽が出て育っていく様子を追っています。



こんな
写真絵本も！

『やっぱりじゃない!』

作／チョーヒカル
1,694円(フレーベル館)
こんがり焼けたおいしそうなピザと思ったら、カボチャでした。甘い和菓子、じやなくて、みかん。小さい魚じやなくて、豆など、見た目で想像するのとはまったく違うものがどんどんあらわれます。



『ひき石と24丁のとうふ』

作／大西暢夫
1,760円(アリス館)
人里離れた誰もいない山の中に、一軒のお豆腐屋さんがいました。目があまりよく見えない90歳を超えたミナおばあちゃんは、二升五合の大豆腐を6時間かけてひき石でひいて、豆腐をつくります。



『テントウムシみつけ!』

構成・文／里中正紀
1,870円(徳間書店)

春、野原にはたくさんの虫たちが動き始めます。テントウムシを見つけるには、エサとなるアブラムシがいるカラスノエンドウを探しましょう。テントウムシを触ってみると、死んだふりをして、脚から黄色い汁を出します。



『うまれたよ! ヤモリ』

写真・文／関 慎太郎
2,640円(岩崎書店)
昼間は物陰に隠れ、狭い隙間をいくヤモリは、暗くて人目につかない場所に卵を産みます。お母さんヤモリは年に1回から3回、一度に2個の卵を産みます。2カ月後、産み落とされた卵の殻をつきやぶつて、赤ちゃんヤモリが姿をあらわします。

もう
読んだ?

新刊
100!!

2025年6~8月に発売された新刊絵本の中から、
読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。
子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順 ※右は右開きの本。左は縦開きの本。

マークは乳幼児から、中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覗ください。

今号の
注目

『はじめてあう きょうりゅう』

作／バスチャン・コントレール
訳／真鍋 真
2,200円(岩波書店)

博物館で出会える恐竜の化石からは、大きさ、食べていたもの、同じ時代に生きていた動物など、いろんなことがわかります。スピノサウルスやティプロドクスなど、ステンシルでカラフルに描かれた恐竜たちです。



編集の三輪侑紀子さんより

そぎ落とした表現とデザイン的な発想の楽しさがぎゅっとつまつた、異色の恐竜絵本ができました。ページをめくれば「恐竜ってどんな生きもの?」「何を食べていたのかな?」など、恐竜に興味を持ち始めた小さな子と一緒に知りたい基本のポイントが、スマートに紹介されています。翻訳は、恐竜博士の真鍋真先生。最新の研究結果もふまえ、あたかな語り口で丁寧に訳してくださいました。プレゼントにもおすすめです!

『100この タネが とんでもった』

文／イザベル・ミニヨス・マルティンス
絵／河野やラ政枝
訳／木下真穂
1,650円(岩波書店)

1本の松から飛びだした100個の種。道路に落ちた10個、川に沈んだ20個、石の上に落ちた10個、鳥に食べられた25個……。種たちはどうなるの? ドキドキの大冒険です。



『おっ!』

作／高畠 純
1,540円(絵本館)

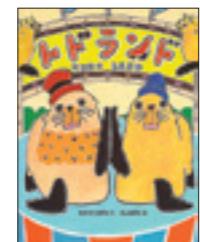
誰かの後ろ姿が、ページをめくると振り向いて「おっ!」。動物の愉快な顔があらわれて思わず笑顔です。とほけた表情が楽しくて何度もめくりたくなります。動物の後ろ姿から振り向いた表情を想像してみましょう。



『トドランド』

文／おおなり修司
絵／丸山誠司
1,540円(絵本館)

ここは、夢のトドランドです。マークはトド、ガイドもトド……。あちらもこちらもトドだけです。おみやげは粘土のトド、パレードもトド! トドトドトド、リズムに乗って、トドの世界を満喫です。



『ねたくない ちっちゃな パンダ』

作／ティヴィッド・ウォーカー
訳／ギヨウ・ヤマグチ
1,870円(イマジネイション・プラス)

森のちっちゃなパンダは、友だちと遊ぶのが大好きです。日が暮れておやすみの時間になつても、まだ寝たくありません。そこでママとパパは、ちっちゃなパンダが眠くなる方法を、いろいろと考えました。



『なつだね』

作／合田里美
1,870円(岩崎書店)

日差しや風、におい、海の色。五感で夏の始まりを感じます。ランドセルを玄関に放り投げて海へ行ってみると、たくさんの人たちが夏を感じに来ました。うれしくなって、思わず海へ走りだしたります。



『ポタポタ ぴちゃん!』

作／中垣ゆたか
1,540円(岩崎書店)

ポタポタぴちゃん! しづくの音から始まり、次から次へとオノマトペがつながっていきます。楽器の音あり、動物の鳴き声あり、大きな音から小さな音までテンポよく進み、登場人物も増えてとてもぎやかになりました。



『まるで むかしばなし のような ハンス・クリスチヤン・アンデルセンの一生』

文／ジェイン・ヨーレン
絵／ブルーク・ボイントン・ヒューズ
訳／福本友美子
1,760円(岩崎書店)

母親は、字は読めないけれど、聞いたことのあるおはなしは全部覚えていました。そのおはなしを聞いて育った男の子は、いつの日か詩人作家になりたいと思っていましたが、大きくなるまで学校に行けませんでした。



『そらのさんぽ』

詩／石津ちひろ
絵／荒井良二
1,540円(岩崎書店)

川べりに並んで咲く菜の花、さえずりの練習をするウグイス、かじったりんご、ネコ、空の雲……、すぐそばにある光景をあたかな言葉で紡いた20編の詩がおさめられています。声に出して味わってみませんか?

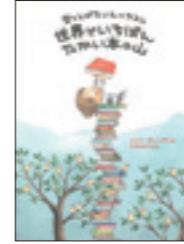


著作権保護コンテンツ

『空をとびたいルーカスと 世界でいちばんかい本の山』

作／ロシオ・ボニージャ
訳／中井はるの
2,310円(アチエロ)

ルーカスは小さなときからずっと、空を飛びたいと思っていました。ママは「とぶ方法は、ほかにあるわ」と言って1冊の本をくれました。夢中で本を読むルーカス。その日からルーカスは飛び始めました。



『いくぞ～ ヒトデのほし』

絵／ともながたろ
文／なかひろみ
監修／木暮陽一、幸塚久典
1,650円(アリス館)

空の星たちが、海の底に棲んでいるヒトデに会いにやってきました。友だちになれるかな。「目や口はどこにあるの?」「何を食べるの?」。星たちは興味津々。50種類以上のヒトデが登場し、その秘密に迫ります。



『かきごおりの ゆきだるま』

作／山岡ひかる
1,320円(アリス館)

暑い夏のある日、ゆきだるまのコタは「しろくまや」にかき氷を食べに出かけることになりました。雲の合間から太陽がのぞくと、今にも溶けてしまいそうです。売り切れる前に、コタはやっとお店に着くことができました。



『きたよ きたよ きせつのこ』

詩／杉本深由起

絵／吉田尚令
1,760円(あかね書房)



忘れ物名人のはるこさんは、つくしの坊やや小鳥のさえずりを取りに戻るので、なかなか春になりません。早起きのなつおくん、静けさが好きなあきえさん、わんぱくなふゆたくん、どの子も楽しい季節の子です。

『おっ!』

『まるで むかしばなし のような ハンス・クリスチヤン・アンデルセンの一生』

作／ローレン・ロング
訳／林 木林
1,980円(あすなろ書房)

お日さまのようにピカピカな黄色いスクールバスは、子どもや老人たちを大切な場所から大切な場所へと運んでいました。時は流れ、動かなくなつたバスは、川べりに置き去りにされ、忘れられようとしていました。



『トドランド』

『きいろいバス』

作／エリザベス・ズーノン
訳／千葉茂樹
1,980円(あすなろ書房)

ラクダのキャラバンで、タウデニからトンプクトウまで塩を運ぶ日がやってきました。ぼくのラクダ、ラクマールに岩塩を積んで出発です。商人の父さんと歩くサハラ砂漠の旅には、この先どんなことが待っているのでしょうか。



『そらのさんぽ』

『ラクダで塩をはこぶ道 サハラ砂漠750キロの旅』

作／エリザベス・ズーノン
訳／千葉茂樹
1,980円(あすなろ書房)

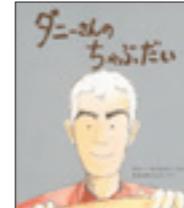
ラクダのキャラバンで、タウデニからトンプクトウまで塩を運ぶ日がやってきました。ぼくのラクダ、ラクマールに岩塩を積んで出発です。商人の父さんと歩くサハラ砂漠の旅には、この先どんなことが待っているのでしょうか。



『ダニーさんの ちゃぶだい』

企画／ダニー・ネフセタイ
作／なるかわしんご
1,980円(イマジネイション・プラス)

イスラエル生まれのダニーさんは、国を守るために軍隊に入り、徴兵制を終えると日本にやってきました。公園で敵と思っていた国々の人たちと親しくなり、平和を願う丸いちゃぶ台づくりを始めることにしました。



著作権保護コンテンツ

プログラム(各10～15分) 小学校高学年

1月 テーマ: 午年の初読み

①『あけましておめでとう』

文／中川ひろたか 絵／村上康成
1,540円(童心社)

この絵本のお正月の風景は今は珍しいかも知れませんが、新年を祝う気持ちは昔も今も変わらないと思います。



②『十二支のしんねんかい』

文／みきつきみ 画／柳原良平
1,210円(こぐま社)

はつきとり、リズミカルに読みましょう！最後のページの干支の紹介は厳かに、大げさに読んでみてください。



③『この世でいちばん すばらしい馬』

文・絵／チェン・ジャンホン 訳／平岡敦
2,090円(徳間書店)

2026年の干支の午(馬)が出てくる本を読みます。と言って読み始めてもいいですね。



2月 テーマ: 昔ばなしの鬼と現代の鬼??

①『いっしんぼうし』

作／いしいももこ 絵／あきのふく
1,210円(福音館書店)

昔ばなしを語るように読むのが理想ですが、難しければ、せめてゆつたり読みましょう。



②『オニのサラリーマン』

文／富安陽子 絵／大島妙子
1,760円(福音館書店)

最後のページの「わし、オニでんねん。すんまへん」ところは、なりきってどうぞ。



3月 テーマ: 新年度へ旅立ちのときに

①『あさになったので まどをあけますよ』

作／荒井良二
1,430円(偕成社)

東日本大震災の直後に作者が思いを込めて制作した絵本です。その思いが伝わるように読みます。



②『とべ！ ちいさいプロペラき』

作／小風さち 絵／山本忠敬
1,320円(福音館書店)

クライマックスの小さなプロペラ機が飛び立つシーンは、臨場感たっぷりと。



③『おとなからきみへ』

作／サトシン 絵／羽尻利門
1,760円(主婦の友社)

「みなさんを、ずっとずっと応援しているよ！」という思いを込めて。



(横山裕美)

プログラム(各10～15分) 小学校中学年

1月 テーマ: 今年は午年

①『なんでもできる!?』

作／五味太郎
1,320円(偕成社)

人と馬の掛け合いで進む展開を元気に読みましょう。ふたりで読み合っても楽しいです。前向きな気持ちで一年を始められますよ。



②『空とぶ馬と七人のきょうだい モンゴルの北斗七星のおはなし』

文／イチノロブ・ガントル
絵／バーサンスレン・ボロルマー 訳／津田紀子
1,760円(あかつき教育図書)

次はじっくり昔ばなしの世界に入ってもらいましょう。星を見る目が変わるかもしれません。



2月 テーマ: 雪の森の中では

①『ゆきの ゆきちゃん』

作／さくちき
2,750円(ミシマ社)

ゆきちゃんと一緒に、雪の中で思いきり跳ねましよう。詩的な言葉はリズミカルに読むと、楽しさが伝わりますよ。



②『こんこんさまに さしあげそうろう』

作／森 はな 絵／梶山俊夫
1,870円(PHP研究所)

厳しい冬の世界ですが、母子ギツネの愛情や、ギツネと共に存しようとする人間の姿に、気持ちちはほっこりあたたかくなります。

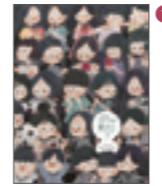


3月 テーマ: 君にエールをおくります

①『ぼくが見える?』

作／パク・ジヒ 訳／おおたけよみ
1,540円(光村教育図書)

ヨンウくんが勇気を出して踏みだす一歩を、応援したくなりますね。韓国の絵本だと教えてあげると、名前もなるほどと思います。



②『おおきなかべが あったとさ』

文／サトシン 絵／広瀬克也
1,650円(文溪堂)

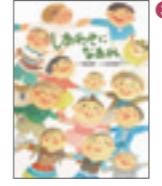
次々にあらわれる壁を乗り越えていくのは爽快です。みんなの力で越えていくシーンでは、声を合わせてどーんと倒せたらいいですね。



③『しあわせになあれ』

詩／弓削田健介 絵／松成真理子
1,430円(瑞雲舎)

言葉と絵をじっくり味わってもらえるよう、ゆっくりと読みます。子どもたちが幸せになつてほしい、と願いをこめて読み終えます。



(栗生真弓)

プログラム(各10～15分) 小学校低学年

1月 テーマ: 冬には欠かせません

①『みかんのひみつ』

監修／鈴木伸一 写真／岩間史朗
1,430円(ひさかたチャイルド)

みかんのひみつが満載です。おうちでも話題にできるよう、ゆっくり読みきかせをします。



②『わたしのゆたんぽ』

作／きたむらさとし 1,320円(偕成社)
湯たんぽになじみがない子が大半でしょうか。エコな暖房器具で、ペットボトルでも代用できるんだよと、補足説明をしましょう。

③『トムがてぶくろおとしたら』

文／ジム・エイルズワース
絵／バーバラ・マクリントック
訳／福本友美子 1,760円(犀の工房)

暖を求める動物たちの気持ちになって読むと、驚きの結末に、さらに盛り上がります。



2月 テーマ: 2月のいろんな記念日

①『かえるをのんだ ととさん』

再話／日野十成 絵／斎藤隆夫
1,320円(福音館書店)

何の日でしょうか？ 鬼が登場したところで、「鬼の嫌いな日は？」とヒントを出すと、「わかつた！」の声が上がりそうですね。



②『チョコレートがおいしいわけ』

作／はんだのどか 1,650円(アリス館)
14日はバレンタインデー。長い旅をする力才のことを、裏見返しの地図で伝えましょう。

③『ねこのおふろや』

文／くさかみなこ 絵／北村裕花
1,650円(アリス館)

22日はネコの日、この日は特別サービスがありそう……。みんなはどのお風呂に入りたい？



3月 テーマ: 春を知らせます

①『ほとんほとんは なんのおと』

作／神沢利子 絵／平山英三
1,320円(福音館書店)

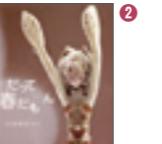
ぼうやが耳にする音は少しずつ春へ向かう音。母子の会話から春の近づき具合がわかります。



②『だって春だもん』

写真・文／小寺卓矢 1,540円(アリス館)

クマの親子が駆け出した先はこの森かもしれませんね。一緒に春の訪れを楽しみましょう。



③『おなべおなべ にえたかな?』

作／こいでやすこ
1,320円(福音館書店)

おなべとやりとりして、春のスープは大成功です！ どんな味かな？ おなかがすいてきましたね。



(岩井淳子)



対象別おはなし会のプログラムです。
ここで紹介する絵本や紙芝居は、
ご家庭での読みきかせにもおすすめです。
ブックガイドとしてもご活用ください。

行事 絵本・季節の絵本

新しい年

『しめかざり』

文・絵／森須磨子
1,430円(福音館書店)
お正月に飾る、注連飾り。ワラからつくるのは同じでも、その形は、地域や飾る場所によっていろいろで、さまざまな思いが込められています。

冬



『さっちゃんのてぶくろ』

作／内田麟太郎 絵／ちだのぶこ
1,430円(金の星社)
さっちゃんが、なくした手袋を探していると、雪の下から「手袋がほしい……」とおじさんの声がしました。雪を掘ってみると、それは、大きな手袋でした。

卒園・卒業



『おおきくなったら

きみはなんになる?』

文／藤本ともひこ 絵／村上康成 1,540円(講談社)
なりたいもの、なりたい自分になるため、いろいろなことをたくさんしてみよう！ 卒園・卒業を迎える子どもたちを励まし、エールを送ります。

紙芝居

『おにとふくのかみ』

脚本／千田一彦 絵／福田庄助
2,090円(童心社)
ふたつの山に挟まれた小さな村がありました。北の冬山にすむ鬼に乱暴されて困った村人たちは、南の春山にすむ福の神に相談することにしました。



『やさしい おともだち』

原作／武田雪夫 脚本・絵／瀬名恵子
2,090円(童心社)
お百姓さんの馬小屋では、馬とネズミたちが仲よく暮らしていました。ある晩、馬小屋が火事になりましたが、綱が邪魔をして、馬は逃げることができませんでした。

(安富ゆかり)



保育者の方たちと絵本

保育現場の先生たちは、養成校についてどのように学んできたのでしょうか。
中京学院大学短期大学部の事例を栗岡洋美さんに伺う2回目です。

取材・文／荒木晶子



栗岡洋美 クリオカ・ヒロミ

中京学院大学短期大学部保育科准教授。保育の現場を経て、2014年より現職。専門分野は保育学、教育学。パパ絵本・ママ絵本、保育の中のわらべ歌遊びなどを研究テーマとしている。保育に関する書籍執筆のほか、「乳幼児の発達と絵本」などの講座、「子育て支援事業におけるママ絵本活動の効果」などの学会発表も積極的に行っている。

著作権保護コンテンツ

お母さん自身が絵本を楽しむことで 子どもにとっても心地よい時間に



『今日』
訳／伊藤比呂美
画／下田昌克
1,540円
(福音館書店)

『おこりんほママ』
作／ユック・ハウバー
訳／小森香折
1,375円(小学館)

『ちょっとだけ』
作／瀧村有子
絵／鈴木永子
1,320円(福音館書店)

『たいせつなこと』
作／マーガレット・ワイズ・ブラウン
絵／レナード・ワイスガード
訳／うちだややこ
1,595円(フレーベル館)

お母さん自身が絵本を楽しむことで、子どもにとっても心地よい時間にあります。子どもたちが絵本を読んでいます。子どもたちの年齢は1歳から2歳くらいと、「くりくりらんど」とは異なる年齢層なので、絵本の選び方が違りますし、人形劇など視覚的な注目を集めることも大切になり、学生たちはいろいろ工夫しながら取り組んでいます。子どもたちが読みきかせに集中してくれるので、お母さんたちは安心して「ママ絵本」を楽しめているようです。

学生たちを見ていても、ほとんどが絵本にいい印象を持つています。それは、絵本から何かを得るというよりも、うれしい、心地よい、楽しいなど、あたたかい記憶につながる大事なものがそこにあります。子どもたちが読みきかせながらだと感じています。

日々の生活で忘れていたる気持ちを思い出させてくれる絵本を

「ママ絵本」で読んでいるのは、私が「ママたちにこそ読みたい絵本100冊」として選んだ絵本です。私自身が母として読んでみて、忙しさや子育ての大変さのために忘れている気持ちや感覚を思い出させてくれるような絵本を選んでいます。

サロンでよく読むのは「たいせつなこと」や「ちょうどだけ」ですが、まず子育ての悩みを話し合つてから絵本を読むことが多いので、何冊か用意していく、悩みの内容や集まったお母さんたちの雰囲気もよくあります。

たとえば、子どもに怒つてばかりというお母さんは「おこりんほママ」や「ぼくおかあさんのこと

の笑顔が増えたらしいなと思っています。「ママ絵本」を始めたのは、保育の現場にいたころのことがきっかけです。「子どもに絵本を読まなくなりや」「絵本は何歳から読んだほうがいい?」などお母さんたちは絵本や読みきかせにプレッシャーを感じました。でも、私は親子で絵本タイムを楽しんでほしいと思いましたし、今もそう思っています。

まずは、お母さんたちに絵本を好きになってほしい。そして、「ママ絵本」を通して「あなたがいてくれるだけで幸せ」という無条件にわが子を愛する気持ちや、「あなたが子をいとおしく思う気持ちを再確認することで、お母さんたちも安心して「ママ絵本」を楽しめます。

「ママ絵本」を。一生懸命すぎるぐらい子育てにまつすぐなお母さんは「今日」や「おかあさんだもの」(アリス館)などという具合です。

絵本を読んでいると涙を流されるお母さんもありますし、「大人でも絵本でこんな気持ちになれなんだ」「改めて絵本が好きと再確認できた」「育児中は自分がと回しになりがちだから、自分のために読んでもらえるのがうれしい」などの感想が寄せられ、手ごたえを感じています。

子どもたちの豊かな絵本体験には保育の現場で子どもたちが豊かな絵本体験を得るには、保育者によるチョイスがとても重要になります。学生たちには、まずたくさん絵本があることを知つてほしいし、実際に触れてほしいと思っています。

そのためにも、大学の図書館に新しく絵本を入れる際には「この本読んで!」などを参考にしながら、ジャンルや作者などができるだけ偏らないようにしています。授業では、「私の好きな絵本」

というテーマで、学生が絵本を持ち寄って、どのようなところに惹かれたのかを伝え合うこともあります。

私自身は書店でひと目ぼれしで以来、かがくひろしさんの『おもじのきもち』(講談社)が大好きで、学生の前で思わず熱弁をふるつてしまつこともあります。かがくひざんの絵本の主役は人間ではなく、学生たちは、その絵本に対する感想が寄せられ、手ごたえを感じています。

今、私のイチ推しは『がまんのケーキ』(教育画劇)。「この本読んで!」⁸⁹(2023年冬)号でかがくひざんのお人柄に触れて、ますます好きになりました。

学生にも、さまざまな絵本から「おもしろい」「素敵だな」「この絵いいな」など、何かを感じてほしいと思っています。保育者自身が絵本に対しても感じていることが子どもたちに伝わり、「読みたい」「一緒に味わいたい」と思つてくれると思うからです。

絵本に興味を持つて楽しみながら、ジャンルや作者などができる子どもと一緒に絵本を楽しめる保育者になつてほしいですね。

子育てサロンでお母さんたちに 絵本を読む「ママ絵本」

ちも安心して「ママ絵本」を楽しめているようです。

「ママ絵本」を始めたのは、保育の現場にいたころのことがきっかけです。「子どもに絵本を読まなくなりや」「絵本は何歳から読んだほうがいい?」などお母さんたちは絵本や読みきかせにプレッシャーを感じました。でも、私は親子で絵本タイムを楽しんでほしいと思いましたし、今もそう思っています。

子どもにとつても、そういう環境で育つことは幸せにつながると思います。

絵本の魅力は

特に乳幼児にとって、絵本は大うもの。その時間は心地よい言葉のシャワーを浴びるような幸せな時間で、それをつくりだせることがあります。

子どもの発達や成長を促すためではなく、「お母さん自身が読み時間がや空間が子どもにとって心地よい」という気持ちで読むことで、その

支援の必要な子 と絵本

神奈川県立平塚盲学校では、幼稚部から高等部まで、多彩な読書活動が行われています。

前回は、幼児期から始まる読書体験を紹介しました。第2回となる今回は「読書支援編」。

小学部を中心に、絵本や本との出会いがどのように学びへつながっていくのか、先生方の取り組みとともにお届けします。

取材・文／小山まゆみ



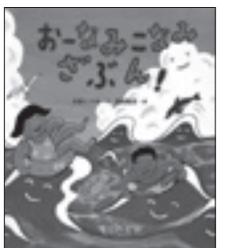
『おおきなかぶ
ロシアの昔話』

再話／A.トルストイ
訳／内田莉莎子
画／佐藤忠良
1,320円(福音館書店)



『もりもりくません』

作／長野ヒデ子
絵／ススキコージ
1,320円(鈴木出版)



『おーなみこなみ
ざぶん!』

作／長野ヒデ子
絵／西村繁男
1,430円(校成出版社)



『ぐるぐるカレー』

作／矢野アケミ
1,100円(アリス館)

す。読書を通して「幼稚園で触ったよ」「見たよ」という体験の積み重ねは、その子にとって大きな土台になります。そして、その体験が豊かであればあるほど、文章を読んだときにイメージを広げる力につながっています。

点字でも、音声でも。
広がる読書の世界

——授業と読書活動は、どのように連携していますか。

小学校部 1～6年生の国語の授業の中で、「図書館と仲よし」などの学習を行っています。私のクラスでは、朝の会の前に読書の時間を設けています。さらに、週に2回「課題コミュニケーション」という国語の授業で、おもに絵本の読みきかせを行っています。また、その日の給食に出るメニューに合わせて絵本を読むク

ラスもあります。たとえば、カレーの日には『ぐるぐるカレー』を読むなど、子どもたちの生活と読書をつなげています。
池谷さん 小学部の先生方が児童と一緒に図書館へ来て、絵本を選んでいられる姿もよく見られます。とくに給食に関連する「食べ物の本」は人気で、子どもたちの反応もいいですね。

——学年が上がると、どうなりますか。

小学校部 生活科のまち探検の一環として、地域の図書館へ行つた学年もありますし、6年生では公共図書館へ行く学習を行っています。中学部ではさらにステップアップし、本で調べる学習に広がります。修学旅行に関連する資料を探したり、家庭科の授業でレシピを調べたり。授業と図書館利用がしっかりと結びついています。

調べる資料は点字です。生徒によつて案内する資料は異なりますが、質問を自分でまとめて聞けるようにすることも、授業の大切なねらいです。
幼稚部 中学部の教員によると、多くの生徒が「サピエ図書館（視覚障がい者向けに点字や音声で読める電子図書を提供する全国ネットワーク）」を活用しています。サピエ図書館には耳で聞くデイジーフォンや点字図書があり、専用の点字携帯端末にダウンロードして利用します。こうした音声図書を日常的に聞くことは、中学部の生徒にとって当たり前のことです。

——読書好きの生徒さんが多いのですね。

幼稚部 ある生徒は乳幼児相談のところからお母さんと一緒に本を借りに来ており、その習慣

神奈川県立平塚盲学校では、幼稚部から高等部まで、多彩な読書活動が行われています。

前回は、幼児期から始まる読書体験を紹介しました。第2回となる今回は「読書支援編」。

小学部を中心に、絵本や本との出会いがどのように学びへつながっていくのか、先生方の取り組みとともにお届けします。

選書の鍵は、言葉の響き。
体験活動で理解を深める

——幼稚部での読書支援では、ゆっくり話すことや、絵本に登場するものにふれる体験、さらに動作と言葉を結びつける工夫が大切だと伺いました。

田中さん (以下、幼稚部) もうひとつ大事なのは音の響きです。子どもたちは、擬音が大好き。リズムのある言葉にふれると、自分から言葉を出してみようという気持ちが芽生えます。私たちはそうした体験をひとつひとつ積み重ねられるよう支援しています。

1910(明治43)年に開校された平塚盲学校は、幼稚部から高等部(本科普通科、専攻科)までの教育課程があり、寄宿舎も併設されています。写真は左から学校司書・池谷晶子さん、教務部教諭・畠谷克枝さん、小学部教諭・滝口千代さん、幼稚部教諭・田中麻衣さん。



——読書支援の方法は、成長とともにどのように変わっていくのでしょうか。

滝口さん (以下、小学校部) 幼稚部からの流れを受けて、具体物にふれる体験を続けています。加えて、本に合わせた体験活動を読書のたびに取り入れています。たとえば、松ぼっくりを拾って転がしてみたり、おにぎりの絵本ではおにぎりになりきって転がったり。『おおきなかぶ』では、みんなでかぶを引っぱるなど、言葉と行動を結びつけて学べるよう工夫しています。

——選書の際は、どのような点を意識されていますか。

幼稚期の読書体験が育むイメージの力

——選書の際は、どのような点を意識されていますか。

小学校部 小学部でも音を大切にしています。たとえば、覚えやすいリズムの言葉や、繰り返しの表現が出てくる本を選ぶことが多いですね。子どもたちは耳から入る言葉の響きに敏感で、「これ好き！」とすぐ反応してくれます。

幼稚部 その「わお！」のところは、みんなで一緒に声をそろえるのがお約束。私も好きな言葉やリズムは、その後の学年には、歌が出てきます。調子がはずれる先生もいますが、それがまた楽しいんですね。小さいころに絵本や歌でふれた言葉やリズムは、その後の学年には、歌が出てきます。調子がはずれる先生もいますが、それがまた楽しいんですね。

小学校部 「もりもりくません」では、「もりもりくわお！」とリズムをつけて読むのが定番です。

畠谷さん (以下、教務部) 声の調子まで、教員と同じように真似する子も多いですね。

——読書支援の方は、成長とともにどのように変わっていくのでしょうか。

本の言葉を口にしている姿を見ると、教員は「さつき読んだおはなしだ！」と気づき、思わずうれしくなります。